

日本の言語景観における英語の誤用傾向

森下 美和

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 〒650-8586 神戸市中央区港島 1-1-3

E-mail: miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

あらまし 著者はこれまで、国内外の観光都市における言語景観について、観光支援の視点から、路上の案内表示、店舗内表示、メニューなどに見られる言語表記を記録・分析してきた。本稿では、日本国内で見られる英語の誤用・不適切な使用の例に着目し、日本語母語話者によると思われる誤用の特徴的な例を紹介し、その原因について考察を試みる。日本国内の言語景観に見られる英語表記には、辞書や文書作成ソフトなどのスペルチェック機能で簡単に確認できそうな単語の綴りなどについての間違いや、英語による表記の基本が習得できていないことに起因するのではないかとと思われる句読点の使用や大文字と小文字の使い分けについての間違いなどが多く見受けられる。さらに、英語に不慣れな設置者が機械翻訳などの訳出結果を検討せずにそのまま使用しているため、意味不明になっている例や、英語としては一見するとそれなりに意味が通りそうだが、語用論的・社会言語学的に不適切な例も見受けられる。単に間違いの例を挙げるだけでなく、どのような点が不適切であるかを考えることは、それ自体が英語学習に有益な課題であると考えられ、英語教育の在り方を見直し、新しいカリキュラムや教材の開発につながる事が期待できる。

キーワード 観光、言語景観、非英語母語話者による英語表現

Non-native English Expressions found in Linguistic Landscapes of Japan

Miwa MORISHITA

Faculty of Global Communication, Kobe Gakuin University 1-1-3 Minatojima, Chuo-ku, Kobe 650-8586 Japan

E-mail: miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

Abstract The author has been conducting research on language landscapes in tourist cities in Japan and abroad from the perspective of tourism resource development, taking pictures, video-recording, and analyzing language notations found on street signs, in-store displays, menus, and so on. In this paper, she focuses on examples of errors and inappropriate use of English found in Japan, discusses some characteristic examples of errors that seem to be caused by insufficient understanding and/or proficiency of English among native Japanese speakers, and attempts to clarify the possible causes of such errors. The English language landscapes in Japan contain many errors in the spelling of words that can be easily corrected with a dictionary or word spelling checker, as well as errors in punctuation and capitalization, which may be due to a lack of knowledge of the basics of English punctuation and spelling. In addition, there are examples where the meaning is unclear because whoever is in charge of the translation uses translation systems without examining the resulting translation. Although the meaning of the English sentences or expressions seems reasonably clear, they may be inappropriate from a pragmatic or sociolinguistic viewpoint. The author believes that listing examples of errors as well as analyzing possible causes of those errors is an important issue for English language learning, which will lead to a reconsideration of English language education in Japan and development of new curricula and teaching materials.

Keywords Tourism, Linguistic Landscape, Non-native English Expression

1. はじめに

著者はこれまで、国内外の観光都市における言語景観について、観光支援の視点から、路上の案内表示、店舗内表示、メニューなどに見られる言語表記を記録・分析してきた。本稿では、日本国内で見られる英語の誤用・不適切な使用の例に着目し、日本語母語話

者によると思われる誤用の特徴的な例を紹介し、その原因について考察を試みる。

日本国内の言語景観に見られる英語表記には、辞書や文書作成ソフトなどのスペルチェック機能で簡単に確認できそうな単語の綴りなどについての間違いや、英語による表記の基本が習得できていないことに起因

するのではないかと思われる句読点の使用や大文字と小文字の使い分けについての間違いなどが多く見受けられる。さらに、英語に不慣れた設置者が機械翻訳などの訳出結果を検討せずにそのまま使用しているため、意味不明になっている例や、英語としては一見するとそれなりに意味が通りそうだが、語用論的・社会言語学的に不適切な例も見受けられる。

単に間違いの例を挙げるだけでなく、どのような点が不適切であるかを考えることは、それ自体が英語学習に有益な課題であると考えられ、英語教育の在り方を見直し、新しいカリキュラムや教材の開発につながることを期待できる。

2. 研究の背景

日本政府のインバウンド観光客誘致の方針が功を奏したためか、長期間にわたり横ばいであった訪日インバウンド観光客数は、2013年に初めて年間1,000万人を超え、2015年にはほぼ2,000万人となり、2018年には3,000万人を突破した[1]。そして、新型コロナウイルス感染症の世界的流行が始まる2020年の1月までは、毎月250万人前後のインバウンド観光客が日本各地を訪れていた[2]。

非日本語母語話者に言語情報を提供するにあたっての問題については、著者はこれまでもさまざまに議論してきたが([3], [4]ほか)、コロナ禍によってインバウンド観光客をほとんど目にすることがなくなったことに伴い、言語景観も大きく変化してきた。日本でも、京都のような観光都市ではオーバーツーリズムなどの問題が発生していたが[5]、インバウンド観光ブームがいったんリセットされた今だからこそ、多言語による情報提供や日本語から多言語への翻訳の在り方について、じっくり検討する必要があると思われる。本稿ではそのための方法として、日本国内の言語景観に見られる英語の誤用・不適切な使用の例に着目し、日本語母語話者によると思われる誤用の特徴的な例を紹介し、その原因について考察を試みることにした。

著者は、所属大学において観光学や通訳・翻訳学の授業を担当するため、言語景観調査で得られたデータを元に教材開発をすることを検討している。英語で書かれた看板・案内板・注意書き・道路標識などの写真やイラストに解説などを添えた市販の学習書はすでに存在しているが、そこで見られる主に英語圏のものであると思われる英語には、語彙や文法に間違いがないことが前提となっている。しかしながら実際には、店舗やレストランなどの一般の施設では、英語として不適切であったり、意味不明な表現が至るところで見られ、間違いの種類もさまざまである。インバウンド観光客にとって誤解を招く恐れがあるだけでなく、日本

人英語学習者にとっても決して良い見本にはならないような英語の表記が散見される現状は、日本が観光立国を目指す上で少しでも早く対応しなくてはならない問題であり、そのための言語や文化に関する教育も必須であると考えられる。

3. 英語の誤用の代表的な実例

本章では、2021年10月から11月にかけて、著者が日本国内の言語景観調査で見つけた英語の誤用の中で代表的な実例をいくつか紹介する。多言語表記の場合もあるが、今回は英語のみを取り上げることとし、日本語が併記されている場合は表記されている順番で両言語を記載する。

なお、個人情報保護などのため、場所や個人が特定されないように写真やイラストなどの掲載はせず、最小限の文字情報のみを記載することとした。

3.1. 綴り・句読点の間違い

単純な綴りの間違いも多いが、スペースやピリオドの使い方や大文字・小文字の使い分けが不自然なケースをよく見かける。また、日本人特有の傾向としては、英語を書くのに日本語フォント(全角文字)を使っていたり、クォーテーションマーク(「や『」)などの代わりにカギ括弧(「」や『』)を使っていることもある。これらの間違いはたいてい致命的ではないものの、特にインバウンド観光客の場合、すぐに理解できなかったり、誤解を招いたりする恐れもある。

1) Wellcome (横浜山手西洋館)

2) CRFT BEER (神戸の酒屋)

3) Put your shoes on here before you walk in the garden.(wooden floor no shose!!) (京都の寺院)

1) は weblio 英和辞典によると、"obsolete spelling of welcome" (welcome の旧式の綴り)とあり、現代英語としては適切な綴りとは言いがたい。

2) は不注意による間違いか正しい綴りを知らないかのどちらであるか判断はできないが、ある程度英語を勉強している人なら、何度か目にすれば違和感を持つはずである(なお、英語母語話者によっては、このような母音を省略した表記に抵抗がない場合もある模様である)。

3) は "on here" が不自然であるものの、前半は英語として理解可能であるが、ピリオドのあとにスペースがなく()の使い方が不自然であり、"shose" は "shoes" の綴りを誤ったものと思われる。また、()内の表現が英文として構成されておらず、意味を取りに

くい上に、大文字・小文字の使い分けがなく、全体として単語を並べただけになっている。

3.2. 文法の間違い

綴り・句読点の間違いと並んで多いのが、文法の間違いである。理解しにくいという程度で済む場合もあるが、内容によっては大きな誤解を招く恐れもあるため注意が必要である。

- 1) 窓が開いている場合換気中です
Opening This Window to Get Fresh Air.
(神戸のローカルバスの車中)
- 2) 坂を下りて直進
To go down a slope. (京都の寺院)
- 3) 写真撮影 OK
It is welcome to take photos but no flash (京都の寺院)
- 4) こちらがカメラマンであると判断した場合入場をお断りいたします。
When judging that this was a cameraman, we refuse to enter. (京都の寺院)
- 5) お願い
Please (東京のデパート)
- 6) 防犯カメラ作動中
Security camera in operation, current. (東京の店舗)
- 7) Open until around 10:00am-4:30pm
営業時間 10:00~16:30 まで (日光のホテル)
- 8) この冷蔵庫は冷凍保存できません。
This refrigerator cannot be frozen. (日光のホテル)
- 9) トイレットペーパーの使い切りにご協力ください
Please "using up a roll of toilet paper" (東京のホテル)

1) は文法的に不適切であるが、"Opening" を "Open" と読み取って命令文であると誤解した場合は、窓が閉まっていれば開けようとする可能性がある。さらに、日本語では、「体調がすぐれない等、換気が必要でないお客様は、窓をお閉め下さい。」との補足説明があるが、英語ではこれに対応する説明がない。このような翻訳の欠落は、内容的に必要な場合は問題ないが、スペースの都合であったり、翻訳の手間を省くためなど、内容との整合性がない場合は、全体としてメッセージがうまく伝わらない可能性が高い。

2) は "To" を取って命令文と解釈すればある程度理解できるが、簡単な地図と矢印が併記されていることで、日本語にある「直進」の説明を補足できているようであった。実際には、"Go down this slope and keep straight" などの英文が望ましい。

3) は写真撮影が許可されているのであれば、"You are welcome to take photos" とするべきであり、後半も "without (a) flash" などとするのが自然である。写真撮影が禁止されているのであれば、"You are prohibited from taking photos" あるいは "It's prohibited to take photos" となるため、用法が混乱した可能性もある。しかしながら、少し辞書を引けば正しい用法が書かれており、観光英語としての慣用表現も見つかるはずなので、きちんとした対応を心がけたいところである。

4) はそもそも日本語自体が分かりにくく、誤訳を招きやすい表現であると思われる。そこで、DeepL 翻訳ツール (<https://www.deepl.com/translator>) および Google 翻訳 (<https://translate.google.com/>) の 2 種類の機械翻訳ツールで検索してみた。前者では、"If we determine that you are a photographer, you will not be allowed to enter." となり、日本語の意図がある程度は伝わるが、後者では、"If we determine that this is a cameraman, we will refuse admission." となり、実際の英文表記に近い誤訳であった。"When judging" という表現は「～の審査にあたっては」という意味になるため、せめて "When judged" にしたいところである。後半の "this" は日本語では「当方」「われわれ」のつもりで「こちら」と表現したものを、そのまま英語に直訳した結果であると思われる。さらに、「カメラマンであると判断した場合」が "was a cameraman" と続いているので、全体として見当外れな英文になっている。ここでは、"When judged that the shootings are for profit, we may decline such activities within our property." などの表現が求められるだろう。

5) は通常 "Notice" などとするべきところである。

6) は慣用表現であり、英語では一般的に "Security [surveillance] cameras in operation" などと表現される。最後につけられた "current" は「傾向・風潮・潮流」などを意味する名詞または「今の・現在の」を意味する形容詞であり、「現在は（～中で）」という意味を示したかったのだとしても品詞が異なる。文法的に正しい文では、"Security [surveillance] cameras currently in operation" などと副詞として使用するはずであるが、いずれにしても不要である。

7) は "Open (from) 10:00am until [to] 4:30pm" とすればよいはずが、現状の英文は直訳すると「午前 10 時から午後 4 時半ぐらいまでの間は開いています」、つまり「閉まるのは、午前 10 時から午後 4 時半ぐらいま

での間」の意味となる。状況として明らかにおかしいことが推測できるが、このような接続詞を正しく使えないと、大きな誤解を招く恐れもある。TOEIC テストに頻出する "by" と "until" の違いなどの基本的な接続詞の用法は、実社会でも重要であることが分かる。

8) の「この冷蔵庫は冷凍保存できません」を DeepL で検索してみると、まさに "This refrigerator cannot be frozen." という英文が出てくるが、冷蔵庫を冷凍保存することはできない・しないので、意味的におかしいことに気が付かないと具合が悪い。

9) の「トイレトペーパーの使い切りにご協力ください」はビジネスホテルのトイレでよく目にするようになったが、日本語自体が言葉足らずであり、言語以前の問題があると思われる。DeepL で検索してみると "Please help us use up all the toilet paper." という英文が出てくるが、「お客さまが全部使い切ってください」とも解釈できる。実際には、(環境保護のため) ゲストが変わるたびに新品と交換することはせず、途中まで使ったトイレトペーパーをセッティングしています、ということが言いたいのだろうが、日本特有の不思議な文化である。ここでは「トイレトペーパーの使い切り」を慣用表現のように "using up a roll of toilet paper" と訳し、文頭に "Please" をつけているため、さらに分かりにくい英文となっている。

本章で紹介する実例は、文面を読んで理解しようとしなくても、ほとんどが状況から意味を推測できるため、大きな誤解につながらないと考えられるが、インバウンド観光客にとっては即座に理解できないことも多く、心理的な負担をかけることになると思われる。全体として、基本的な文法を疎かにしたり、日本語の曖昧な表現を機械翻訳などでそのまま翻訳しようとしたことが間違いにつながっているようであり、少しぐらい分かりにくい表現であっても、相手（ここではインバウンド観光客）がきっと意味を汲み取ってくれるだろうという甘えが感じられる。

3.3. 表現として不適切な例

形式的には英語になっているが慣用的でない表現や、言いたいこととその英語が表す意味がずれている表現なども少なくない。3.1 や 3.2 は辞書を参照したり、文書作成ソフトなどの機能を利用すれば正解が分かるのに対し、以下のような例はなかなか自己修正しづらいついと言えるだろう。

1) "Our shop is a Miso restaurant"
you can enjoy authentic miso food and There are plenty of sake!
Would you like to try authentic Japanese sake?
(京都のレストラン)

2) 左側通行にご協力願います。
Please cooperate with the left side traffic
(京都の地下鉄)

3) Please do not pull,
!!Sliding door!! (京都の路地)

4) 次、止まります。
It stops. (神戸のローカルバスの車中)

5) 公衆トイレ (W.C) は近くにありますので、そちらをご利用下さい。
If you do not use our shop, please do not use the toilet !!
Public toilet (restroom) is nearby, so please use it.
(日光の土産物店)

6) 撮影目的の方のご拝観はお断りします。
DO NOT ENTER. WE HAVE THE RIGHT TO REFUSE
THE SERVICE. (京都の寺院)

1) は英文のみで表記されており、日本語を含む他の言語は併記されていなかった。引用符の使い方や大文字・小文字の使用など小さな間違いのほかは英語として文法的に大きく間違っているわけではないが、表現が稚拙で舌足らずな印象を与える。英語圏から来日したインバウンド観光客にとっては、非英語母語話者である日本人の舌足らずな表現やちょっとした間違いは微笑ましいものであり、必ずしもマイナス評価にはならないようであるが[6]、日本人と同じく非英語母語話者の観光客やこのような英文を目にする英語学習者にとってはあまり良い見本であるとは言えない。

2) の日本語はよく使う慣用表現であるため、機械翻訳でも検索しやすいと思われる。DeepL では、"Please drive on the left." または "Please keep to the left." という表現が出てくるが、Google では、2) の英文と同じ結果となる。DeepL のほうが Google よりも多少こなれた英訳ではあるが、英文の注意書きでは命令形にいちいち "Please" をつけないなどの決まりを知っていれば、より自然な英訳になるだろう。

3) は英語 "Sliding door" と中国語「滑門」のみで表記されているが、「引き戸」をどう開けるかは日本人には分かるがインバウンド観光客には分かりづらいということであろうか。該当するもの自体に注意書きが貼られているので一目瞭然ではあるが、英文としては稚拙である。

4) はバスの車中で停車ボタンを押したときに電光掲示板に現れる表現である。日本語でも情報不足であ

るが、英語では特に違和感がある。電車の場合は、降りる人の有無に関わらず停車するので、たとえば東海道新幹線であれば、"We will be stopping at Shin-Kobe station before arriving at Shin-Osaka terminal." のような英文が電光掲示板に現れ、同時にアナウンスも聞こえる。ローカルバスに乗るのは地元の常連の人たちだけでは限らないので、少なくとも「次」や "it" で済まさずに、停留所の名称を案内するなどの配慮が欲しい。

5) はトイレを使用したい人にとっては即座に理解しづらいという点で不親切に感じられる。"For customers only. Public restrooms are available nearby." などの分かりやすく慣用的な表現の使用が望ましい。

6) は3.2の4) と同じ場所で見つけた表記であるが、"the right to refuse service" は「サービスを拒否する権利」という慣用表現である。主に法的文書などに使われるもので、アメリカではレストランやバーなどでも日常的に見かける表現であるが、ここでは「サービス」が何を指すかが不明である。英語使用者はすべて撮影目的という前提がある模様で、配慮が足りない。

4. まとめと今後の展望

著者のこれまでの調査から、日本の言語景観に見られる英語の表記・表現には、さまざまな問題点があることが再確認できた。

森下ほか (2019) では、同じ場所を表す英語表記が統一されていないケースを紹介した。関連して、「通り」を示すのに、"Avenue," "Street," "Road," "Dori" など複数の単語が、意識的に使い分けられているのではなく、明確に区別されずに混用されていることを指摘しており、公的な表記でさえもルールが曖昧であることが分かっている[7]。

私的な表記については、明らかな間違いも見受けられる。3.1や3.2のような間違いであれば、辞書を参照したり、文書作成ソフトなどの機能を利用すれば正しい表記・表現が分かるが、3.3 は英語力がある程度なければうまく対応できない間違いである。3.3 の 5) や 6) に見られる否定文は、英語としては非常に強い命令・指示の印象を与えるので望ましくないが、これらのように、英語として文法的に成立していても、間違いであったり表現が強すぎるなど、語用論的・社会言語学的に不適切な例もあると思われる。今回取り挙げたような言語表記のみでは、誰が誰に向けているかが分かりにくいのが、今後は語用論的・社会言語学的な観点からも調査を進めたいと考えている。

磯野 (2020) は、海外の言語景観で見られる日本語のほとんどが非日本語母語話者によるもので、特徴的に「間違えている日本語」「不自然・不適切な日本語」であることが多いが、その原因を考え、正しく直す練

習は有用な学習手段になると述べている[8]。この主張の意図するところを英語について援用すると、言語景観に見られる英語に関しても、日本国内で主に日本人英語学習者によって作成されたと思われる表記・表現について調査すること、英語圏で英語母語話者と非母語話者によると思われる英語を比較・検討することなどが、今後の調査の課題として浮かび上がってくる。

近年の機械翻訳は品質向上が目覚ましく、特に DeepL などの出力結果を見てみると、形の整ったしつかりとした文(文章)に見える。しかし、原文と比べてみると、一部脱落していたり、趣旨が異なっていたり、語用論的・社会言語学的に不適切になっていることもある[9]。こうした機械翻訳を利用することは、比較的容易に日本語以外の掲示などを用意することにつながるが、入力言語と出力言語の双方にある程度以上堪能な人間のチェックを経ないと、見た人を混乱・困惑させる可能性があることには十分留意すべきであろう。

今後は、文字だけでなく音声についてもデータ収集を試みる予定である。例えば新幹線の車内アナウンスでは、"If you notice any suspicious item or behavior, please notify staff immediately." というフレーズをよく耳にするが、途中の "please" という単語のイントネーションが下がり、直後に明確なポーズが入っていることがある。その場合は、「お願いだから連絡してください」という意味になり、聞いていて不自然な印象を与える。このように微妙なイントネーションの違いで、社会言語学的に不適切な意味になってしまう例もある[10]。

今回の調査でも明らかになったように、不適切な英語の表記・表現が日本中にあふれている現状は、ある意味で日本の英語教育の失敗を示している。その原因がどこにあるのかを探ることが、今後の日本における英語教育の改善にもつながると考えられる。

謝 辞

本研究は、科研費基盤研究(C): 課題番号 20K00822 『英語教育に生かす言語景観研究: 誤用分析と異文化コミュニケーションの観点から』(研究代表者: 森下美和)、科研費基盤研究(C): 課題番号 18K11849 『ネット社会におけるインバウンド観光客・定住者を意識した文化伝達の言語表現』(研究代表者: 平松裕子)、科研費基盤研究(B): 課題番号 17H02249 『ICT による観光資源開発支援: 心理学的効果を応用した期待感向上』(研究代表者: 伊藤篤)、科研費基盤研究(C): 課題番号 21K00744 『高度翻訳知識に基づく翻訳文法の構築に関する研究』(研究代表者: 佐良木昌) の助成を受けている。

文 献

- [1] 日本政府観光局 (2021) 「年別訪日外客数の推移」
<https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--transition>
- [2] JTB 総合研究所 (2021) 「インバウンド訪日外国人動向」
<https://www.tourism.jp/tourism-database/stats/inbound/>
- [3] 森下美和 (2021 年 4 月) 「プライベートスペースの言語景観の紹介」第 177 回次世代大学教育研究会 (オンライン開催)
- [4] 森下美和 (2021) 「言語景観とピクトグラム」電子情報通信学会『信学技報』, vol. 121, no. 87, TL2021-10, 38-43.
- [5] 高坂晶子 (2020) 「オーバーツーリズム: 観光に消費されないまちの作り方」学芸出版社
- [6] 平松裕子 (2019) 「日光の言語景観とインバウンド観光客のインタラクション: 文化と伝統を超えて」日本認知科学会第 36 回大会発表論文集, 1047-1051.
- [7] 森下美和・平松裕子・原田康也 (2019) 「神戸の言語景観: その特徴と歴史的背景」電子情報通信学会『信学技報』, vol. 118, no. 516, TL2018-66, 89-94.
- [8] 磯野英治 (2020) 「言語景観から学ぶ日本語」大修館書店
- [9] 佐良木昌 (2021 年 12 月) 「機械翻訳の陥穽」日本英語表現学会第 50 回全国大会 (オンライン開催)
- [10] 原田康也 (2021 年 12 月) 「エージェントと環境との意味的インタラクション: 音響的仮想空間との交渉と追憶」第 185 回次世代大学教育研究会 (オンライン開催)